



## 年間第 28 主日 (ルカ 17:11-19)

この人のほかに神を賛美する人はいないのか

年間第 28 主日を迎えました。年間主日は第 33 主日、その後の「王であるキリスト」を迎えると待降節ですから、あと 5 週かそこらで年間の主日は終了です。この年間の季節の終盤に、これほど大きな台風が日本に接近、あるいは上陸して、話題にしたり心配したりするとは思ってもみませんでした。

さて今週与えられた福音朗読箇所「重い皮膚病を患っている十人の人をいやす」物語から、「神を賛美できる人になれて初めて、私たちは救われた人になれる」この結論にたどり着きたいと思います。ごく身近なことでも、私たちは神様の愛と憐れみの恩恵を受けていて、それを理解したなら、具体的に感謝すべきだ、ということです。

ごく身近なことから始めましょう。ミサに参加して、司祭が唱える奉献文に耳を傾けていると、今現在三人の牧者の名前を呼んでいます。一人は教皇フランシスコ、一人はヨセフ高見三明大司教、一人はペトロ中村倫明補佐司教です。補佐司教様の名前をすっかり忘れて、言い直すこともあります。今現在ほぼ毎日この三人の牧者の名前を呼んでいます。

ところで、この三人の牧者の名前を呼ぶことは、当然なこと、別に不思議でも何でもないことでしょうか。決してそうではありません。教皇様について言えば、前任者のベネディクト 16 世名誉教皇は 2 月 28 日に引退されました。次の教皇選挙が行われたのは 3 月 12 日、新しい教皇様が選ばれたのは翌 13 日でした。

およそ二週間、私たちは教皇様の名前を呼ぶことができなかったのです。二千年続く教会、266 代の歴代教皇によって引き継がれてきた教会ですが、教皇様がお亡くなりになるたび、また選挙のたびに、名前を呼ぶことができない時間を 200 回以上経験してきたのです。

司教様についてはどうでしょうか。司教様を与えられていない期間を司教座の空位期間と呼びますが、長崎教区は幸いに空位期間はそれほど長くは経験したことはありません。最近では島本大司教様がお亡くなりになったあと空位期間がしばらくあって、高見司教様が教区長になりました。長崎はそうですが、すでにお隣の福岡教区は、四月の下旬から司教座は空位であり、5 ヶ月以上が経過しています。つまり福岡教区は現在ミサ奉献文ではおそらく「私たちの教父フランシスコ、日本の司教団、すべての教役者をはじめ、全世界を愛の完成に導いてください」と唱えているわけです。5 ヶ月もですよ。ほかにも、新潟教区も司教座は空位になっております。

これだけでも、教皇様、司教様を与えられるのは当然ではなくて、感謝すべきことだということが分かります。司祭はこれらの牧者の名前を毎日唱えますし、信者の皆さんも「今日は誰の名前が出るかな？」みたいな場面ではないので聞き流しているかも知れません。けれどもたと

えば教区長の名前を呼ばずに毎日毎日ミサをささげている教区、司祭方がおられることを考えれば、ミサのたった一箇所でありながら、ありがたいな、感謝すべきだなとあらためて理解できます。

さて福音朗読、重い皮膚病を患った十人の人がイエスに憐れみをこい求めました。「声を張り上げて、『イエスさま、先生、どうか、わたしたちを憐れんでください』と言った。」(17・13) そのうちの九人はユダヤ人、一人はサマリア人でした。もしかしたらこの時点から、心にある思いは違っていたのかも知れません。九人のユダヤ人は「私たちはあなた様と同じユダヤ人です」と考え、サマリア人は「外国人扱いの私ですが、もし憐れみを受けられるのであれば」そんな思いだったかも知れません。

彼ら十人は、祭司のもとに体を見せに行く時点ですでにいやしを体験していました。九人が「あなた様と同じユダヤ人です」と考えていたとしたら、いやしを体験しても次の行動には移らないでしょう。私たちが何気なく教皇様、司教様の名前を唱えてミサをしているような状態です。「これはあって当然のことではない。」そう思うなら、新たな行動を起こすに違いありません。感謝の祈りをささげ、この幸せが続くようにと願うでしょう。

サマリア人は、自分の身に起こったことを「こうなって当然だ」とは考えませんでした。すぐに次の行動を起こしたのです。サマリア人は礼拝の問題でユダヤ人からは救いを遠ざけられている人々と思われていました。そのサマリア人にも、イエスの愛と憐れみは届いたのです。必ず、神は救う。救いを求める人に必ず答えてくださるイエスに、祭司に体を見せに行く途中気づいて、「大声で神を賛美しながら戻って来た」(17・15) のです。

「大声で」神を賛美することがふだんの生活にあるでしょうか。私は神のなさり方、神の不思議な計らいに触れて、大声で思い出し笑いをしたことがあります。頭の中に消そうとしても消せないものがあり、思い悩んでいた時、テレビを見ていて思い悩んでいたものがこれで完全に払拭できる、そう感じた瞬間でした。「これが神様のなさり方だ。私はこうして前を向くことができるようにしていただいたのだ」そう感じた時、あまりのおかしさに大声で笑ったのです。

ミサに参加して、私たちは当たり前のように受けている恩恵を、あらためて見直してはいかがでしょうか。82歳の教皇様が長崎に来てくださいます。当たり前では決してないと思います。この田平教会に昨年度10万人の人が訪ねてきました。そのうちの何人かは、貴重な献金をしてくださいました。当たり前前に当てにしたり、何の感謝も感動もなく受け取ったりしているのではないのでしょうか。

聖歌を歌う時、招きの祈りに答える時、「大声で」歌い、唱えてみてはいかがでしょうか。歌っているのかつぶやいているのか分からないのでは、私たちはイエスから「ほかの九人はどこにいるのか」(17・17)と言われるに違いありません。